ヴァンパイア・オブ・ヘヴン

遠波天爾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァンパイア・オブ・ヘヴン

【Ｎコード】
Ｎ９５０７Ｃ

【作者名】
遠波天爾

【あらすじ】
人口１万人にも満たない小さな島に住む、礼とゆう。二人とも今年、高校３年生になるが、進路に悩む礼に対して能天気なゆうにいつもイライラさせられる。そんなとき、島に原因不明の病気が流行しも島の人々が次々に死んでいく。二人の共通の友人、仁もその病気で亡くなるが・・・。彼の死後、彼を見たと言う者が現れる。

第1話

この島の8月の海はいつもキラキラしていて眩しい。
毎年のことではあるが、退屈はしない。
この島で育った桜沢　礼は今年で18歳になる。
海の水面をぼんやりと眺めながら
今年高校3年になる礼は迷っていた。
この島を離れて、就職すべきかそれとも、
父親の影響で始めたモトクロスの選手になるかだった。
「はあ、、どうしたらいいんだろオレ」独り言を呟く礼の後ろで声がした。
「おーい、レーイ、何やってんのー」
声の主は、幼馴染のゆうだった。
「ははーん、また海に向かって良からぬ想像してたでしょー」
「バカっ、そんなんじゃないよ」と慌てて言い返す礼。
「だったら何考えてたか、言ってみなさいよー」
「お前にそんなこと関係ねぇだろが」
と礼が言い捨てて、立ち去ろうとすると
「ねぇ、知ってる？」　尋ねる、ゆう。
「はん、何がだよ」
「ほら、岬の灯台さあ、今度取り壊しになるんだって」
「それがどうしたんだよ。関係ないっつうの」とやや切れ気味に礼。
「あんなボロ灯台早くなくなれっつうの」さらに畳み掛ける。
「あそこでさあ、よく遊んだじゃない。かくれんぼしたりさ、おにごっこしたりさあ」
「何か、寂しくない？」首をすこし傾げてゆう。
「あのさ、そんなこと言いにわざわざ来たの？お前、よっぽど暇だねぇ」
腕組みしながら半ば礼は呆れている。

「おまえには、悩みというモンがないのか。苦悩というモンが」
「あるわよっ。もうちょっと、やせないかなとか、もうちょっと胸が大きくなんないかなとかいろいろあるわよっ」ムキになってゆうが言い返す。
「フーッ」無言で鼻から大きなため息をつくと、礼はスタスタ歩き出した。
「ちょっと待ちなさいよー」後を追いかけるゆう。

第2話

「お前、どうすんだよ。高校出たら」ぶっきらぼうに聞く礼。
「何よ急に。あんたこそ、どうすんのよ」切り返す、ゆう。
「あんたさあ、見ためよりは頭いいんだからさあ、大学とか行かないの」続ける。
「ほんと、ムカツクわ。お前。オレ行くから」
礼は自分の傍らに止めていた自分のバイクにキーを差し込むとエンジンをかけた。
「あんたさあ、バイク禁止でしょー」
ゴーグルつきのヘルメットをかぶりながら
「関係ねーし」と一言いうと、エンジン音を轟かせながら走り去ってしまった。「何よ、心配してやってんのにさ」とゆうは納得いかない様子だ。
「モトクロスの選手になんか本当になれると思ってんのかなあ。あいつ、、」

ゆうと別れた後、海岸沿いの道をバイクで飛ばす礼。
不意に胸ポケの携帯が震えた。
道端に止めて、着信を見た。ゆうだったら無視するつもりだった。
礼の母親からだった。
「何だよ。用件ならメールでよこせっつうの」
母親にかけなおす礼。すぐにつながる。
「何だよ、これから岩場で練習すんだから」半分キレ気味の礼。
「じ、仁ちゃんがね、、」そこから母親の声が震えている。
ただならぬ予感をかき消したい。
「仁がどうしたんだよっ」
「・・仁ちゃん、亡くなったって・・」消え入るような声。
「マジか・・」そこから、携帯を握った手はだらりと垂れた。

仁はゆうと同じく小さい頃からの幼馴染だ。
同じ幼稚園、小学校、中学校、高校とやってきた。

第3話

何とか気を取り直し、急いで家に戻った礼が、
母親から聞いた話はこうだった
仁の母親曰く、
仁は夜中、どこかへ出かけらしく、朝方、帰ってきた。
昼近くに叱ろうとして起こそうとしたら、仁の様子が変なので
慌てて、救急車を呼んだらすでに心臓が止まっていたというのだ。
蘇生を試みたが無駄に終わったとのことだった。
今、仁の身体は一応、変死扱いということで、司法解剖に回される
ことになり
監察医の下にあるとのことだった。

母親の様子からして、とても嘘とは思えないが
未だに、仁のことが信じられない。
昨日、仁と話したばかりだったのだ。
可愛い彼女と知り合ったとのことで
近々紹介するとも言っていた。
ヤツにとっては幸せの時が続こうとしていたのに。

「そうだ。ゆうにも知らせなきゃ」
携帯を取り、ゆうにつなげる。
「オレだ。」
「何よ、急に」
「落ち着いて聞けよ」
「だから、何よ」
「仁がな、、、」
「仁が、どうしたのよ」
「仁が死んだよ」

「ええっ」
「あのね、人をからかうんなら、もっとマシな・・」
「おい、今から、仁の所へ行くぞっ」
「ええっ、ちょっと、訳わかんないんだけど、」
携帯はすでに切れていた。

「おばさん、、、」
仁の家に着いた二人だったが、
その後の言葉が次げない。
「ああっ、礼ちゃん、ゆうちゃん」
二人の顔を見た瞬間、泣き崩れる仁の母。
「何があったんですか。おばさんっ。」
ただ、ただ、仁の母親は泣くばかりだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9507c/

ヴァンパイア・オブ・ヘヴン

2011年1月8日23時16分発行